

『カタツムリ』

菊野 啓

—

突然の轟音が、工場内の静寂を破った。黒い虫みたいな部品が、床に撒き散らされている。ひよいと首を伸ばして、皆が目を向けた。白いマスクに防塵衣の姿は、川に舞い下りた白鷺の集団に見えた。タカシと同じ派遣社員の山田が、小柄な背中をさらに縮めて、無数の電池パックを拾い集める。三交代でフル稼働だった製造ラインは、現在半分以下に減産縮小している。金融危機とやらが原因だ。

「風が吹いたら桶屋が儲かる」

正規社員の高木がくれたことを言う。

「アメリカがクシャミしたら日本が風邪引くだろ」と笑っていたら、あれよあれよというまに、アメリカがひいた風邪で、世界中の国が寝込んでしまった。

リチウム電池では、世界的なシェアを誇るこのヤマサン電気にも、逆風が吹き下ろした。タカシたち派遣社員の多くは、本日締めをもつて雇い止めとなる。いわゆる派遣切りというやつだ。短大生の娘を持つ山田は、来年五十歳を迎える。年末というのに、求職者で混み合うハローワークへ日参していた。

定刻にはすべての動力が落ち、早い日暮れが訪れた。解雇通知一枚貰って、ロッカーの私物を片付ける。淡々と物事が進む。

近くのうどん屋でお別れ会をしようと、高木が山田とタカシを誘った。用もないので、付き合うことにした。注文は家族うどん二千円也、子供が行水できそうな木の盥に、大量のうどんが泳いでいる。三方から箸を突っ込み、艶やかで長いうどんを掬う。熱くて辛い汁にくぐらせ、すする。夕食時だというのに、他に客はいない。暇そうなレジ係の顔も冴えない。不景気という名の憂鬱が、風呂の壁の黒カビみたいに広がっていく。

「日本はまだいい国だよ。北朝鮮やアフリカみたいに、飢え死にしたりしないもんなあ」

タカシよりふたつ年下の高木に、悪気はない。

「慰めになってない」

と軽く頭をはたいてやる。高卒で入社して一年間、高木は正社員として、タカシたちと同じ現場で働いてきた。仕事の手ほどきをして

やったのは、班長の山田だ。立場が違えど特別な意識もなく、仲良くやってきた。高木にはまだ解雇通知は来ていない。

「自爆テロもないし」高木はさらにずれる。

「平和呆けしてるよ、この国は。思いがけない災厄が、これからも繰り返す気がする」

眉間に皺を寄せて山田が言った。禿げ上がった額に玉の汗を浮かべて、絶え間なくうどんをすすり込む。いくら食っても、盥の底が見えない。よほど大食いの家族を想定している。

山田がうどんを食す姿を見ていると、なぜだかほっとする。困窮しながらも、肉体は旺盛な食欲を発揮して、逞しく主人を支えている。歯科医の知人から、人間は一本の消化管に過ぎない、という話を聞いた。口から肛門に繋がる長い管、その機能を維持するためだけに、脳や四肢、他のすべての臓器が付属すると考えるといい、と彼は笑った。

「ミミズみたいなもんか？」タカシが聞くと、「そのとおり。ウンコという黄金を産み出すために生きている」と頷いた。

山田の消化管は、十分すぎるほど健康で図太い。大量のうどんを消化しようと、のたうっている。

「なににせよ。まず腹一杯喰おう。落ち込んだときはそれが一番。ほら、まだ残ってるよ」

布袋のように膨れた腹をさする。

「何かいい方策はありましたか？」

消極的ながら、タカシも職探しを始めていた。

「ない」と言下に、山田は首を振る。

「急ですもんね」

「大丈夫さ。君らはまだ若い」山田は優しい。

「仕事はきつとみつかる。もっといいところが雇ってくれるさ」どこまでも樂觀的だ。

満腹をかかえて店を出た。冷たい木枯らしが頬を叩く。軽く手を上げて、三人は別れた。

タカシはバイクのエンジンをかけて、そろそろと走り出す。クリスマスシーズンにしては、いつになく寂しい国道を走る。赤いオフロードバイクは、プレゼントを持たないサンタの乗る、痩せたトナカイのように見えた。

二

昼過ぎになって、やっと目覚めた。ごそごと起き出し台所へ行くと、妹のサトミが、不機嫌そうな顔でトーストを囓っている。

「あれ？今日って日曜日だっけ？」

タカシが冷蔵庫を開けながら聞くと、「冬休みだから」と素っ気なく答える。

「なんか怒ってる？」冷えた牛乳を飲んだ。

「べつに」やっぱり様子がおかしい。

「今日はスケッチに出かけないのか？」

県立高校二年生のサトミは、美術部で絵を描いている。画家になるのが、将来の夢だ。

「行かない。寒いから」冬には冬の描く物がある、といつも自転車で出かけていた。

「まあ、少しは受験勉強もしなきゃな」

「あたし、進学するのやめようかと思う。お金かかるし」東京の芸術大学を志望していたはずだ。進学を取りやめ、市内のデザイン室に就職して、絵を続けるつもりだと言う。

「それって、俺の派遣切りと関係ある？」

「ない。あたしの進路だから」

頑なに唇を結んだ。こうなると妹は手強い。

「東京に行けよ。絵をやる夢はどうした？」

「芸術は死んだ」きっぱりとサトミは言った。

「お母さんも体調悪いし。働いて少しでも助けたいんだ」とけなげに付け加える。

「もつとずっと先のことでいいよ」

「今が大変でしょう」あんたもそんなだし、という言葉が後に続く、はずだ。

「俺もすぐ次の仕事見つけるさ」

言っではみたものの、あてはない。

「だから、あんたとは関係ないってば」

呑気に構えていたのが、急に恥ずかしくなる。

「クリスマスだぞ。不景気なこと言わずに、街に出ろ」支離滅裂だ。

「言われなくても、これからバイトだよ」

デイパックを掴んで、サトミは家を出て行く。立て付けの悪いドアが、乱暴に閉まった。

妹の低気圧の原因は貧困にある、とタカシは思う。お金に囚われるのは嫌だが、食うためには働かなくてはならない。しかし、なぜか、せっぱ詰まった気にはなっていない。

「この緊張感のなさは何なのだ？」

タカシは己の不甲斐なさを見つめ、そこに父親の血を感じて慄然とする。父にどんどん似てくる。量の多い黒髪、濃い眉、彫りの深い顔立ち、がっちりした肩幅の長身、写真なんか見分けがつかない。一見二枚目の父は、心の底に、得体の知れない自堕落さを抱えている男だった。五年ほど前に、母とは離婚した。

父が大学生だった頃、母の故郷の広島で二人は知り合い、結婚して四国のこの街で暮らし始めた。父は中学校で教鞭を執り、理科を教えた。タカシ、やがてサトミが生まれた。芹沢家にとって、幸せな時間が長く続いた。

しかし、突然、歯車が狂い始めた。父は、理由もなく何か嫌になった。フィリピンパブに入り浸った。ホステスの部屋にしけ込んで帰らない。仕事もすっぱかす。酒はいくらでも飲む男だった。飲み代に困って、とうとう生徒の給食費を着服する。警察に突き出されないだけよかったが、当然クビになった。

良からぬ金も借りていた。朝、昼、晩と人相の悪い借金取りが、自宅のドアを乱暴に叩く。安普請のアパートが、建物ごと揺れた。タカシは、すでに高校生だった。父が泣きながら、取り立て屋に土下座するのを見た。恐い男が帰ると、けろりとして酒を飲み、テレビのナイター中継を観ている。一家の生活は、機械製作所で事務をする母の給料で賄った。

結局、父はフィリピン女と駆け落ちした。有り金を使い果たし、首が回らなくなると、しおしおと帰宅するような男だった。さすがに母のイクコも愛想を尽かす。父を残して母子三人、行き先も告げず、別のアパートに出奔した。あっさり離婚が成立して、すでに五年、父のその後は誰の口にも上らない。

母は子供二人を養うために、さらに働いた。その金でタカシは地元の短大に通った。アルバイトに明け暮れる大学生活を過ごし、とりあえず卒業した。電気工学を学んだが、何の役にも立たない。ろくな就職も決まらず、アルバイトを繋いだ末に、派遣会社からヤマサン電気に入った。名前の通りはいいが、製造ラインに座るただの工員だった。

それでも正社員としての採用を期待して、無遅刻無欠勤、人が変わったように働いた。しかし、金融危機とやらであえなく、派遣切りに遭遇した。憤慨したところで、どうにもならない。人材派遣とはそういう仕組みだったのかと、今頃気付いても遅い。契約書を良く読みもせずハンコを押したのは自分だ。諦めも早い。格別、焦りもない。危機意識の麻痺した、父親そっくりの男がそこにいた。

疑いようもなく、ダメ男の血が流れている。弛みの血漿が精神をだらけさせる。木の上から見下ろす、もう一人の自分が熾烈な嘲罵を投げかけてくる。石を投げ返すのも億劫な自分がここに在る。何かが嫌になるという父の性質を受け継いだ、人を幸せにしない愚か者がそこに蹲っていた。

ぼんやりテレビを眺めていると、母のイクコが帰宅した。気分が悪くて、会社を早退してきたのだという。

「あら、いたの。そうか、仕事探さなきゃね」

イクコは、クビを切られた息子への心遣いを見せる。この母を、貧困から救う方法を思案する。しかし、微塵もあてにはされていない。「じつは、あんたに頼みたいことがあるんだ」

疲れた顔で、唐突にイクコが言った。

「広島のおばあちゃん、最近腰を痛めて大変みたいなの。石みたいに頑丈な人だったんだけど。耳も遠くなってる」

祖母は連れ合いを数年前に亡くし、一人暮らしをしていた。

「広島に行つて、どんな調子か見てきてほしいのよ。年末には私も行こうと思つてたけど、仕事と体調で、ちよつと無理みたい」

イクコは更年期障害だと言うが、総合病院の医者は、甲状腺疾患を疑っているらしい。

「お願い。どうせあんた、ヒマでしょ？」

おやすい御用、と無職無能の息子は答える。

「クリスマスが終わつたら、すぐに発つよ」

「ありがとう。恩にきるわ」

イクコは、少し休むからと上着を脱いだ。寝室に入り、横たわる気配がしたので、タカシはテレビを消した。何もすることがなくなり、キッチンの椅子に座つたまま欠伸をした。

「派遣切り」という自ら掴み取つた不運、行動を伴わない焦燥、諦観に裏打ちされた鈍感、どんよりとした暗雲が真綿のようにじわり、我が身を締め上げていく。ハローワークに寄つてから、ネットカフェにでも籠もるか、タカシは冴えない顔で家を出るのだった。

三

「そう、じゃあ仕方ないわね」

本村ナオコは、煮え立ち始めた鳥鍋をつつきながら言った。

「無職になったら突然、広島に用事ができちゃったよ。正月の約束は悪いけどパスな」

「いつから行くの？」

「明日、早くに出ようと思う」

恋人と過ごす楽しいはずのクリスマスの晩が、初っぱなからガラガラと崩壊していく。

「いいよ。好きにしたら。両親には、あたしからうまく言っておく」元日には、ナオコの家招かれる予定だった。

「仕事のことなら気にしないでいいのに。べつに正直言つたつてかまわない。あなたのせいじゃないもの。両親だって同情してくれる。

私の父に職探しを頼んでみたっていい」

ナオコは素直で率直な女性だ。つぶらな愛を向けてくれる。しかし、見かけだけとはいえ一流企業の社員と、寄る辺ない無職とでは、両

親にお会いする顔つきも違ってしまふ。

ナオコとは、一年前に知り合った。毎年この街の音楽家が集まって開催する、ジャズストリートというイベントに参加した帰り、余韻を楽しもうと立ち寄ったショットバーのカウンターに、彼女は一人でいた。同じパンフレットを持っていたのが、きっかけになった。グラスを傾けながら、ジャズの話に始まり、いろいろなお喋りをした。

「あたし、カタツムリを飼っているの」

「でんでん虫のこと？」

「電力会社に勤めてるからというのは冗談」

俺も毎日電池を作っている、と言うと、おかしそうに笑った。椅子ひとつ空けて座っていた二人の距離が、いつの間にか縮まっていた。彼女は勤め先に近い1LDKのマンションで、一人暮らしをしていた。はじめてその部屋を訪れたとき、タカシはカタツムリが飼育できるのだということを知った。

セルロイドのイチゴパックにサララップをかけ、無数の空気穴を開けた容器が並んでいる。小さな緑色の若葉を散らした中に、貝殻に似たそれらが這いずっていた。顔を近づけても、いっこうに驚きもせず悠然としている。木の芽のにおいがした。

「螺旋形には、右巻きと左巻きがあるのよ」

「雄が左巻き？」

「カタツムリは雌雄同体、オス、メス両方の機能を持つ。それでいて交尾もして、卵を産む。子供ができて、こんなに殖えた」

ナオコの指先に眼を凝らすと、直径三ミリほどの子供のカタツムリが確認できた。乾燥に弱いから毎日霧吹きで水をやる、葉っぱの柔らかいところを食べて生きるのだという。

「一人でオスにもメスにもなれるっていうのは、どんなもんだろう」

「いつも男女がつかいでいなきゃ、不健全だなんて言うつもり？」

「とんでもない。男も女も、所詮、人はたった一人で生まれてきて、常に一人分の孤独に耐えながら生きて、そして一人で死んでいくものだと思っている。たとえいつも一緒にいたとしても」

「カタツムリみたいに？」

「そのとおり」

「なんだか、窮屈な世の中になってしまった。とくに、いい歳の女が一人で生きていくにはね。息が詰まりそう」

彼女はタカシより五歳上の二十七歳だった。独身でいる理由は、聞いてみたことがない。

「カタツムリなんて、どこにも見なくなっただ」

溜息をつくナオコの気持ち胸に落ちた。男のタカシだって、歳をとるにつれて、少しずつ自分の居場所が縮小した気がする。

「人間が殖えすぎたのがいけない。地球を汚し、痛めているのは人間だけさ」

「暗くなりかけた話題をそらしたかった。」

「もつと人間が減ればいいってこと？」

「そう、最良の環境対策は、世界の人口を無差別に、せめて十分の一くらいにすること。そのうち、核戦争が起こるか、巨大な隕石が降るか、おっかないウィルスが蔓延するかして、嫌でもそうなるかもしれないけどね。あとは地球が勝手に回復浄化してくれるさ」

「なんだか、話ちよつとずれてきてない？」

「微笑しながら、ナオコが肩を寄せてきた。」

「言いたいのは、君や僕の孤独の悩みなんて一瞬の夢、たかがしれてるってこと。カタツムリは悩んだりしない」

抱き寄せながら、そつと唇を合わせる。脳をとろけさせる柔らかさだった。

「ところで、カタツムリが交尾するとき、どちらがオスで、どちらがメスの役割をするのか、どうやって決めるんだろうか？」

「相談するか、ひよつとしたらくじ引きかも」

「バカ、とくぐもつた声を出し、腕の中に潜り込んできた。その夜、二人は簡単に、お互いを手に入れ合った。」

それ以来、時々泊まっていくようになった。結婚を意識したことなど、タカシの方にはなかったが、正月に両親と会わせたいというナオコの口ぶりからは、いつにない特別なものを感じていた。ナオコとなら、それでもいいかと思いついて始めた。そのわずか一ヶ月後の今は、まったく温度と方向の違う風が吹いている。予期せぬつむじ風に、大切なものが吹き飛ばされようとしていた。

「あなたの自由にすればいいよ」

「ナオコは目を合わせないで言った。鳥鍋は煮詰まり、グラスのビールも、泡が消えてぬるくなっている。」

「ごめん。すぐにまた埋め合わせするよ」

「謝る必要なんか無い。時々一緒にいられるだけで、お互い十分なのじゃない？」

親鳥が交代で卵を抱くように温めてきた二人分の孤独、それが突然放棄されそうな予感が、二人を気まぐしくしていた。かさかさカタツムリが葉っぱの上を這う音も、その気分を和ませることはできなかった。

四

翌朝、タカシは赤いホンダXL250に乗り、祖母の待つ広島を目指して走り出した。身を切る寒気が海を越えて頭上をすっぽりと

覆い、北から吹き下ろす風には、花びらのような雪が混ざった。瀬戸内海を目指して国道を進み、坂出から高速に乗る。人類の叡智を誇示する巨大な吊り橋の上を、豆粒のようなバイクで渡る。横殴りの突風に、バイクごと数メートルも吹き飛ばされた。眼下に広がる荒くれた海を見下ろす余裕もない。ひたすら前を見据え、かじかんだ手でハンドルにしがみついている。凍った涙が、視界を滲ませた。広島街の街を目指して、ひたすら耐えた。高速を下り、祖母の住む郊外の団地へと向かう。

やっと辿り着いたとき、一瞬の油断が生じた。路面に潜む凍ったマンホールの蓋を踏んだ。頭から、固いアスファルトに投げ出された。バイクが碎ける音を、耳の近くで聞きながら、意識がフェイドアウトしていった。

長い間、浅い眠りの中を彷徨っていた。目を開けると、暗闇だった。布団の中に寝かされている。頭痛がひどかったが、耐え難い喉の渴きを覚え、起き出した。よろけながら光を求め、手探りで隣室の襖を開ける。

異臭が、タカシを迎えた。強烈なアンモニア臭に、目の痛みを覚えた。闇の中で彼を見つめる何者かの視線を感じた。

猫だった。しかも何匹もいる。無機質な光を湛えたガラスビーズみたいな無数の眼が、こちらを見据えている。壁のスイッチを探した。灯りを点けたとたんに、大騒ぎとなった。

唸り声を上げて、猫が部屋中をぐるぐる回る。ソファの上からサイドボード、テレビの上へと、あらゆる物をなぎ倒し飛び交う。ガラスの割れる音と、獰猛な唸り声が交錯する。鋭い爪で攻撃を仕掛けてきた。脛に噛みつくヤツもいる。為す術もなく地団駄踏んでいると、台所から見覚えのある祖母の顔が、にゅつと突き出た。トシエに一喝された猫たちはしゆるしゆると、彼女の背後に姿を消した。

翌日から、タカシは家中の掃除をはじめた。腰を痛めたトシエを二階に追いやり、掃除機と雑巾片手に働いた。山のようなゴミを片付けていく。悪臭を放つ猫どものトイレを洗い、砂を替えてやった。ぼうぼうに生い茂った庭木の間から、彼らはきれいに並んで顔を出し、疑り深そうにタカシを見ている。引っかかれた傷をさすりながら、窓を大きく開け放つと、一番太った黒の鉢割れ柄が、にゃあと鳴いた。

「ダイフクじゃ」とその猫の名前を、トシエが教えてくれた。他にシマ、クロ、シロとその名の通りの三匹だけが、家の中に入るのを許されている。どれも迷い猫で、餌を投げ与えているうちに居着いた。今は猫を家族として、気ままに一人暮らしを楽しんでいる。

猫たちは、すぐにタカシを仲間だと認めたようだ。夜は襖一枚、隔てて眠った。タカシの寝る和室の仏壇には、数年前に亡くなった

祖父の遺骨が、まだ納骨されずにある。

何の感銘もない年が明けた。新年を祝う町内会の集まりがあるというので、トシエに付き添って、集会所に出かけた。

「あんたがお孫さんか。話は聞いとるけえ」

ごま塩頭で赤ら顔の老爺が、人なつこい目で話しかけてきた。町内会長の河井と自己紹介した。タカシの現況を詳しく聞き、ぜひともトシエの家に長く滞在して助けてやって欲しい、と身内のように頼んだ。

「あなた、体は大丈夫でしたか？」

振る舞われた雑煮を食べていると、グレーの髪の毛をオールバックに撫でつけ、色つきの眼鏡をかけた初老の男が近寄ってきた。打越だと名乗る。なまりのないきれいな標準語だったが、気管に穴でも開いていそうな奇妙なしわがれ声だった。

「先日は助けていただいたそうで。お礼にも伺わなくて、すみません」

タカシが頭を下げると、黒い顔に皺を寄せて、打越は手を振った。バイクで転倒し、脳震盪を起こしたタカシを運んでくれたと聞いた。「いいから。バイクはどうしたのかね？」

壊れたままだと答えると、自分が直してやるから持って来いと言う。「私も昔は、ハーレーに乗ってたんだ」

整髪料のにおいが鼻につく。量の多い髪は鬘にしか見えず、顔の皮膚も人工的な張り具合で皺ひとつない。特異な風貌を持つ男だった。

散会になり、河井とトシエの三人で、坂をゆっくりと散歩しながら、家路についた。

「あの、打越っちゆうのとは話さん方がええ」
「まじめな顔で、トシエが忠告した。」

「うん、ほうじゃの。町内会でも、あんまり相手にするもんはおらん」と河井も同調する。

「猫を殺してまわつとるちゆう噂じゃ」

最近、町の中の野良猫だけでなく、首輪を着けた飼い猫も姿が見えなくなっているのだという。打越が保健所に届けた物は、ゴミ袋に入れた猫の死骸だったらしい。

「それより、タカシ君、この町におる間だけ、バイトでもせんね？」
河井が話を変えた。町内会で管理運営している温水プールの監視員が、突然辞めて困っているのだという。

「子供たちがおぼれんように見とつてくれりゃええだけで、簡単な仕事じゃけね」

トシエの勧めもあって引き受けた。タカシは、この町にどこか懐かしさを感じ始めていた。

そろそろ猫たちが腹を空かして、帰りを待ちわびている頃だろう。

路傍の家から、夕食のにおいが漏れてくる。背後の集会所のスピーカーが、午後五時を知らせるドボルザークの「家路」のメロディーを流し始めた。

五

翌日から早速、タカシはプールの監視員を始めた。水着姿でプールサイドのチェアに座り、利用者の安全を監視する。室内は凍てつく窓外が嘘のように温かい。

その日は、障害児の水泳教室の予約が入っていた。タカシより一回り年上に見える女性が、三人の児童を引率してやってきた。三人は兄弟姉妹のように、顔つきが似通っている。

女性が子供たちにてきぱきと指示する。準備体操のあとプールに入れた。一番年少の女児が、尻込みしてどうしても水に近寄らない。あとの二人は、かろうじて背が立つらしく、顔を上げてその様子を見守っている。

小柄な女性は笑いながら、その子に近づき、ひといきに抱き上げ、一緒にプールに入った。子供は、女性の腕にしがみついて泣き叫んだ。

「あなたも水に入って、指導を手伝ってもらえないかしら？」
タカシに笑いかけながら言った。他に利用者は一人もいない。シャツを脱ぎ、プールに飛び込んだ。生温い水が、皮膚を滑らかに洗う。
「二人を、そちらのレーンで泳がしてやって」

指示されたとおりに、タカシは大きい二人の児童の後ろを歩いた。不器用なクロールで、ちゃぶちゃぶと泳いでいく。往復するうち、親子で遊びに来たような錯覚にとらわれた。いずれ自分も家庭を持つのだろうか、タカシはナオコの顔を思い浮かべた。クリスマスの晩以来、メール一本やりとりしていない。

プールの時間が終わり、後かたづけをすませて帰ろうとすると、女性がロビーでくつろいでいた。

「さっきはありがとう。監視員さん」
武知クミコです、とよく揃った白い歯を見せる。雀斑のある丸顔に、化粧気はない。大きな黒い瞳が、健康そうに輝いている。ソファに並んでかけて、しばらく話した。子供たちは、ロビーの玩具で遊んでいた。

「この子たち、ダウン症なの。一番小さな子は私の子供」

水を怖がって泣いていた女児は、アカネという名前で四歳だった。

子供の顔が似ているのは、ダウン症児に特徴的な顔貌なのだという。

「アカネには心臓に欠陥があって、近いうちに手術が必要な。あなたは学生さん？」

「派遣切りにあつたばかりの無職です」
クミコの気さくな雰囲気が、タカシを素直な気持ちにさせた。あたかも、久しぶりに会った姉と話しているようだった。
「あら、そう。お気の毒に。でもどうにかなるわよ。私もこの町に来たばかりの時には、アカネと二人、お先真つ暗だったもの」
クミコは自動販売機からコーヒーを買い、熱い一本を手渡してくれた。優しい目を注いでくる。礼を言つて、受け取つた。
「死のうかと思つたこともある」
と暗さをまったく感じさせない口調で言う。コーヒーの香ばしい匂いをさせながら、彼女は話を続けた。派遣切りにあつたタカシへの同情のせい、クミコは何のてらいもなく、自分に関する込み入つた話を口にした。独り言を口ずさむような話し方だった。

武知クミコは三年前に、銀行員である夫と離婚して、この町にやつてきた。身寄りや知り合いがいるわけではなかった。市営住宅に空きがあるのが、この町だけだったからだ。別れた夫からの多くはない養育費と生活保護で、どうにか暮らしは成り立つ見込みだった。離婚に至る過程は、彼女を大きく傷つけ疲弊させた。アカネの障害にまつわる夫の無理解が、離婚の原因だった。

アカネにダウン症という先天的な障害があることは、出生前からわかつていた。クミコが妊娠したのは三十二歳、夫が三十七歳の時で結婚から五年以上がたつていた。ほとんど諦めていた初めての懐妊を喜んだのも束の間、妊娠中の検査から、胎児の遺伝子異常が判明したときの二人の落胆は大きかった。

しかし、その後の夫婦の反応は、正反対のものだった。妊娠するのは最後のチャンスに思えた。障害があるとはいえ、クミコは我が子を産んで育ててみたかった。夫は仕事のできる強い人間だし、子供と三人で、普通の家庭を作つていけると疑わなかった。ところが、夫は頑なに中絶を勧めた。「この子供は、君の人生の大部分を奪つてしまう」と彼は主張した。子供に奪われる人生がそんなに不幸かしら、と彼女は思つた。おまけに、「君の」だった。彼は何より、銀行員としての自分の地位や世間体を重んじているように見えた。クミコは出産を決意した。周産期になると一人で準備を整え、入院先の病院で、無事アカネを産んだ。赤ん坊の顔を見たら夫も変わつてくれるかもしれない、と淡い期待を抱いていたが無駄だった。ダウン症の子供を、夫は愛することをしなかった。アカネが一歳の時に、協議のうえ離婚した。もとよりこうなることは覚悟の上での出産だったにもかかわらず、いいようのない寂しさが彼女を襲つた。夫を恨むよりも、父親のいないアカネに申し訳ない気持ちで一杯だった。しかし、後悔は微塵もなかった。アカネを愛していたからだ。

この町の老人たちが、クミコを助けた。何かと声をかけ、町内会の集まりや公園での遊びに誘ってくれた。彼女は少しずつ元氣を取り戻し、障害児でも受け入れてくれる保育所を見つけてアカネを預け、その時間だけ近くの弁当屋で働きはじめた。同じ障害を持つ子供の親と横の繋がりができ、このプール教室も開いた。前向きな自信が芽生え始めていた。

「将来、自分の弁当屋を開店することが夢なんだ」とクミコは語った。

「ママ、ママ」と赤い頬を膨らませながら、アカネが駆けてきた。お腹が空いたらしい。

「うん、帰ろう」クミコはアカネを抱き取り、いとおしそうに頼ずりした。

「子供たち、あなたが気に入ったみたい。また指導してやって」と笑いながら立ち上がる。タカシは頷き、アカネに、またねと手を振った。底抜けの笑顔が、そこにあつた。

家族とは、心の中で常に寄り添う者たちのことをいうのだと思つた。腰を痛めたトシエを気遣い、取り囲む猫たちも家族の一員だ。

タカシは、母と妹の暮らす安アパートに想いを馳せた。そこは、おざなりにしがちだが、家族のぬくもりを探れる、世界でたったひとつの特別な場所だった。

六

ダイフクとは「大福」という意味だ。この家に迷い込んで来たときは、まだ掌に乗るサイズだった。今や八歳の牡猫で、体重は八キロの巨漢だ。丸い手で器用に、襖を開けることができた。いつのまにか、タカシの布団の上で寝ている。昨夜うなされて目覚めたら、胸の上にとっかかりと八キロの尻が乗っていた。けして媚びないが、機嫌のいいときに、艶やかな毛を撫でてやると喉を鳴らした。

正月も三が日を過ぎ、世の中は慌ただしさを取り戻しつつあった。タカシの周囲だけは、あいかわらず茫洋とした感じが残っていた。

夕方からの寒波が勢いを増し、冷凍庫の底に沈み込むような夜を迎えた。夜中に、運動会でビデオを回す祖父の夢を見た。トシエの姿もある。タカシが幼稚園児の頃、一度だけ広島から四国を訪ねて来てくれたときの光景が蘇った。なぜ祖父の夢を見たのか、不思議だった。体調を崩したイクコのこと、急に心配になった。自分の娘の行く末を案じる祖父の気がかりが、この家の中には、まだ残っている気がした。枕元の仏壇の遺骨が、カタカタと音をたてたかに思えた。布団に染み込む冷気で目を覚まし、足元のダイフクの姿を

探したが、その姿はどこにもなかった。

そのとき、窓の外で、つむじ風みたいな音がした。猫の唸り声とする。風を切り裂く口笛に似た音が、再び耳に届いた。ぎゃっ、という悲鳴を聞いた。異変に気付いて、飛び起きた。素早くジャージを着込み、床の間に飾られていた模造の日本刀を手にした。部屋の灯りをつけないまま、音をたてずにサッシを引き、庭の様子を窺う。庭石の上にダイフクがいた。タカシに気づかず、一心に毛づくろいしている。後ろ足に絡まった割り箸みたいなものを取ろうと、もがいているのだった。

再び、風切り音が目の前でおこった。鋭い矢が庭の敷石を撃つ。眼下に何者かの存在を認めた。黒いジャンパーを着た若い男が、小さなボウガンを構えて、猫を狙っている。

タカシの瞼の裏で、何かが沸騰した。躍り出て、模造刀でそれをなぎ払った。金属のかち合う激しい音とともに、男は尻餅をついた。呆気にとられた顔で、見上げている。眼鏡の奥の小さな瞳が、恐怖に収縮するのを見た。血管を巡る憤怒の嵐が、刀を頭上高く振り上げさせた時、横から絞り出すような声がした。

「やめてくれ。頼む」

黒づくめの男が立っている。そのしわがれ声には、聞き覚えがあった。ポマードででかるグレイのヘアが見えた。打越だった。

「息子のカズヤです。勘弁してください」

カズヤと呼ばれた足元の若い男は、尻を地面につけたまま後じさり、払い落とされたボウガンを拾うと、弾けた独楽みたいに、駆け出していた。打越が近付いてきた。ゴミ袋らしき白いビニールを、手に提げている。

「息子がおかしくなってしまうたのは、去年の夏くらいからだね」表情を動かさずに言った。ひゅうひゅういう音が、枯れ枝のそよぎみたいな声に混ざる。

ダイフクは、足の矢をくわえ取り、執拗になめている。タカシが近寄ろうとしたら、警戒を見せて身をかわした。びっこを引いているが、傷は深くなさそうだった。闇の中に突っ立ったまま打越は、偶然にもタカシと同一年の息子の話を続けた。

カズヤは祖父も勤めた大手自動車製造会社で、昨年の春まで期間労働者として働いていた。不景気のおおりで雇い止めにあつてから、新しい就職先を見つけられなかった。不器用で寡黙だったが、自動車が好きで、プラモデルを組み立てる延長のような仕事を、心底気に入っていた。ところが紙切れ一枚の通達で、翌日から来なくていいと使い捨てられた。

それ以来、二階の自室に籠もり、食事に呼んでも出てこなくなっ

た。何をしているのか、いつ寝ているのかもわからない。なす術もなく、息子の落胆を眺めているしかなかった。

その夏の殺人的な暑さが、カズヤをさらに狂わせた。ハローワークに出かけた帰り、炎天下の公園のベンチに二時間も座っていた。熱射病で、救急車を呼ぶ騒ぎとなった。

打越は、カズヤが緩慢な自殺を図ったのではないかと思った。心が二つに折れてしまった息子が、列車に飛び込む勇氣はなくとも、照りつける太陽に身を差し出し、自ら死を選ぼうとしたのではないかと。自殺を繰り返さないか、いてもたってもいられない気分だった。氣付かれないように、監視を続けることにした。やがてカズヤは夜中、ボウガンを携え、近所の猫を殺してまわるようになった。狩りを楽しむハンターさながら、暗闇から猫を狙う。嬉々とした表情で、その命を奪った。

打越は戦慄した。あわててカズヤの中に目覚めた怪物と、正面切つて対峙しようとした。殴り合い、掴み合ったこともある。しかし、その努力は逆効果だった。発作的に、自傷を含む暴力を惹起するようになったからだ。家庭内暴力の矛先は、打越たち夫婦のうち、体の弱い妻に向けられることが多かった。

打越が四十歳半ばにして、はじめて授かったひとり息子だった。仕事の多忙を口実に、妻に子育てを任せっきりにしてきた。今まで息子と、大人として向き合ったことが一度もなかった。その放任の咎を、いきなりしつぺ返しされた気がした。

とりあえず彼は、カズヤが殺した猫を拾い集めることにした。矢の突き刺さった死骸を、そのまま放置するわけにはいかなかった。多い時には一晩に五匹もの骸を集めて、こっそりと保健所に持って行った。しばらくして、自分が猫を殺していると噂がたっていることを知ったが、息子が疑われるより良かった。

今になってやっと打越は、カズヤへの自分の愛情の大きさに気付いた。そして、それを言葉にしてきちんと伝えてこなかったことを、心底後悔していた。

「何もかもが狂ってしまった」

と打越は表情のない疲れた顔で話した。

ダイフクは、どこかへ姿を隠していた。砂利の上に落ちているフアイバー製の矢をつまみ上げた。カズヤに対する怒りがこみ上げてきた。同じような目にあつた者はここにもいる、とタカシは言いたかった。深い闇夜は、まだ当分明けそうになかった。

その日の朝、サトミから電話があった。出る前から嫌な予感がした。

「久しぶりね。そっち様子はどう？」

重く沈んだ口調で、妹は聞いた。

「もうしばらく滞在しようかと思うんだけど、母さんは？」一番の気がかりを口にした。

「良くないというか、最悪。お医者さんが言うには、甲状腺の癌の可能性が高いって」

鼓膜が緊張した。「癌」というひと文字が氷の刃となって胸に突き刺さる。返事ができずにいるタカシに、サトミは冷静に話を続けた。

「もう少し詳しい検査をしてから、できるだけ早い目に手術をした方がいいと言われた」

「本人はそのことを知っているのか？」

「知っているわ。私は横で聞いていただけ」

「大丈夫か？母さん」

ゴム鞆を呑んだように、喉がこわばった。

「シヨックだったのは間違いない。部屋でひとり泣いていたもの。

私には、何もできない」

サトミの声が、しだいに涙で濡れていく。

「どうしたらいいの？ねえ、考えてよ。仕事に行くってきかないのよ。休めないからって」

「できるだけ早く、そっちに帰るよ。それまでなんとか頼む。おまえも学校は行けよな」

「私の学校なんて、もうどうでもいいよ。大学進学もやめる」

「よくない。あわてるな。まだ最悪の事態が確定したわけじゃない。どうにかなる」

「どうなるわけ？どうにもならないよ。わたしたちのお母さんだよ」受話器の中が嵐になった。なだめる術もなく、ただ言葉を失う。

「そっちに帰ったら、ゆっくり話そう。だからしっかりしてくれ」返事のないまま、電話は切れた。湿った電子音だけが耳に続いている。母の体の中で増殖する癌細胞を想像し、心臓が苦しくなった。

仕事を失い、何の特技も蓄えもない自分の無力さを呪った。ダメ男の遺伝子を、体中の細胞から駆逐したかった。アルバイトや派遣で定職に就かずにいたのも、仕事を辞めてしまう自らの心の闇を恐れたからだ。それから目をそらし、逃避し続けてきたのだった。タカシは、深い羞恥に自分の心を染めた。

耳の遠いトシエが、どうかしたかと目を向けた。母の病気のことには言わないことにした。

「家に帰った方がええんじゃない？」

腰の痛みは少し楽になってきたらしい。

「うちのことなら気にしてくれんでもええけね、猫もおるし」と皺を寄せて笑った。

その日のうちに、タカシは食料をまとめ買いし、倉庫の中に整理して置いた。家中をくまなく掃除し、庭の植木を刈り、生い茂った雑草を抜く。布団を干し、ゴミをまとめて収集所に出す。猫のトイレを洗い、汚れた窓ガラスを全部拭いた。「ありがとうねえ」と言っ、トシエは猫たちと縁側に腰掛け、冬の陽差しを浴びながら、タカシの仕事ぶりを、うれしそうに眺めていた。

翌日の早朝、事件は起こった。坂道を救急車のけたたましい叫びが駆け回り、すぐさまパトカーも、それに続いた。

「打越さんの家で、何があったんじやろう？」
トシエと一緒に、大きな洋館まで歩いた。

打越と息子のカズヤが、担架に乗せられ運び出されていくのを見た。二人とも、頭から赤いペンキを被ったように血まみれだった。カズヤの片手が、白いシートからだらりと垂れた。トシエが、腰を抜かしそうになった。やがて、野次馬とマスコミでごった返した。

昼にはテレビがニュースを伝えた。暴れる息子が、父親と格闘を始めた。腕力に勝る息子は、初老の父親に馬乗りになり、拳を振り上げ渾身の力で殴りつけた。父親がぐったりと動かなくなっても、狂ったような殴打は続いた。見かねた母親が、リビングの花瓶を息子の後頭部に叩きつける。ドイツ製の巨大な花器だった。小柄な母親に持ち上げられたことが、不思議なほどの代物だった。息子は声もたてずに、あっけなく絶命した。家庭内暴力を、不況による雇い止めもたらした。金融危機が生んだ悲劇だ、とニュースは報じた。

打越家の惨事の影で、もう一つの命が失われていた。屋下がりに、突然トシエがリビングに蹲って肩を震わせている。泣いているのだ。炬燵の布団をはぐって顔を突っ込み、涙声でお経をあげている。大きな黒い毛の塊が、動かなくなっていた。

ダイフクは静かに息を引き取っていた。カズヤにボウガンで撃たれた傷が原因なのか、あるいは猫にも突然死があるのか、判断できなかった。ダイフクの体はまだなま温かく弾力があり、ただ眠っているように見えた。腕の中に抱き取ると、いつも通り丸くなった。わずかな時間で、家族のような存在になっていた。その唐突な死に、タカシの胸は痛んだ。

日が暮れかけた頃、段ボールの箱に入れて、庭の片隅に埋めた。できるだけ深く掘り、スコップで土を被せる。尖った石ころを墓標代わりに乗せ、線香を立てた。トシエとともに、頭を垂れて手を合わせた。残り三匹の猫たちも、悲しそうに並んで座っている。

ダイフクの面影を偲びながら、うる覚えの般若心経を唱えた。カズヤが連れて行ったように思えてならなかった。しかし、なぜか彼

を憎む気にはなれなかった。年齢も仕事を失った境遇も似通ったその青年とは、とうとう一度も言葉を交わす機会はなかった。狂気に呑み込まれて猫を殺し、家族を傷つけ、ついには唯一無二の愛の供給者の手にかかって、この世を去った者を、ただ悼むしかなかった。猫殺しの呪縛から解かれ、笑顔でダイフクを抱くカズヤの姿を思い浮かべた。独特な仕草で、飼い主の癒しを誘うあの賢い猫が、カズヤの魂を狂気から救い出してくれることを願った。薄い涙が、目尻から流れた。三匹の猫が突然、両者の冥福を祈るように声をそろえて鳴き始めた。それはトシエが唱えるお経とともに、暮れなずむ町の坂道を伝い、無人となった打越家の二階にも届いたはずだ。

八

赤いホンダXL250は、壊れた部品を交換し、簡単に蘇った。翌日帰郷するつもりで、荷物をまとめていると、携帯がメールを受信した。元派遣仲間の山田からだった。

《お元気ですか？私はホームヘルパーの資格を取って、介護の仕事をするつもりです。勉強は頭が痛いです》とあった。タカシは《がんばれ、オヤジヘルパー》と打ち返した。

午後から、プールに出向いた。監視員の仕事を、もう一日だけやる予定だった。水着に着替えて、プールサイドに下りると、ほぼ同時に、アカネたちを連れた武知クミコが現れた。今日でしばらく来られないことを伝えると「せっかくお友達になれて、アカネたちも喜んでいたのに」と残念がった。

「落ち着いたら、必ずまた帰ってきます。この仕事、自分に向いていると思うんです」

嘘のない本当の気持ち、タカシは口にした。

「ええ、そう思える仕事ができるといいね。お金にはならないかもしれないけど。でも、仕事って少なくとも苦痛じゃないことをすべきだと思う」クミコは白い歯を見せる。

「私も、今のお弁当屋の仕事が楽しくて仕方ない。もともと、何かおいしい物を作って、誰かに食べさせるのが好きだったのね」鼻の横の雀斑に、少女のような皺を寄せた。

一生かけて行う仕事とはどうあるべきか、と思う。したいこと、苦痛じゃないことをする、それで暮らせれば幸せだ。そう願う一方で、そんな遊びに毛が生えたようなものでいいのか、と自分を戒める。仕事を選ぶ前におまえにできることは何だ？と自嘲してみる。自分が何者なのか、誰も教えてはくれない。

クミコに促されるまま、他に利用者のいないプールに入った。アカネが、タカシの元に来た。水に入るのを怖がって泣いていた頃と

はうってかわり、手足を動かし、水に浮かぶ。

タカシはアカネの手を引いて、後ろ向きに進む。水深百二十センチほどとはいえ、到底足の届かない水の中を、何の不安も見せずに、バタ足をしながら追い縋ってくる。水に顔をつける動作を繰り返し、ぶはあっと大きな息を鼻の穴から吐き出した。

強く握り合った両の指先を、気付かれないように弛めて、するりとアカネを水中に解き放つ。溺れそうになったら、すぐに掬い上げるつもりで、顔を見て一緒に潜った。口と鼻からシャボン玉みたいな気泡を出しながら、アカネは真剣な顔で水を掻いている。水中を不器用なストロークでゆっくりと進む。小さな潜水艦みたいに顔だけ浮上させ、空気を吸い込み、再び自分の意志で力強く潜った。

泳ぎを覚えたてのイルカの子供みたいに、アカネは嬉々として水中を進む。その姿を、そっと見守っている。これが仕事だと言えるなら、派遣社員として電池を作り続けていた頃より、はるかに自分は幸せだ。イクコの病気が快癒したら、再びここに戻ってきたい。

プールの時間が終わり、ソファでクミコと話した。また熱い缶コーヒーを奢ってくれた。子供たちは、薄暗いロビーで遊んでいる。

「日本は豊かな国だけど、職を失い収入の道を絶たれると、誰だって途方に暮れるよね。私もそうだった。でも私は、下向かないで素直に助けてくださいって言ったの。アカネがいたからかもしれない。母は強いのだよ」

とクミコは雀斑を輝かせながら、胸を張った。

「そしたら、見も知らない多くの人に助けられたなあ。行政から生活の支援を受けることもできた。この国も日本人も、まだまだ捨てたもんじゃないなって思った。今では、アカネと一緒に生活しながら、いずれ自分の弁当屋を開きたいなんて、大それた夢を持つこともできるようになったもの」

「経済に打ちのめされています。先立つものがなければ、愛する者も救えません」

袖のほつれた自分のダウンジャケットを見ながら、タカシは言った。ロビーはエアコンが落ちても、いまだに温室のようにぽかぽかと暖かかった。アカネたちの声が、妖精のさえずりのように館内に木霊する。

「煮詰まっちゃったら、卑屈にならないで、助けを求めればいい。そしたらきつと、親身になって助けしてくれる人も現れる。まず家族で助け合うのよ」

クミコは諭すような口調で言った。

「わかりました。妹にもそう言います」

「もちろん一方で、自立する努力を続けるべき。甘えるのが当然と思うようになったらおしまい。自分の足で立てるようになったら、

いずれ社会に恩返しする。私も生活保護を、やっと返上できるめどがついたの。めいっばい働くわ。貧しいけど、やるぞーって感じ」誇らしげに笑う。片手を差し出して、クミコは握手を求めた。その手を軽くつまむと、両手で強く握り返してきた。

「いつかまた、アカネの水泳の先生をしてやって。あんなに怖がらずに、泳ぎが上達したのは、あなたのおかげよ。あなたといると、無口で控えめだけど、不思議な安心感みたいなものを感じる。それってすごいことだよ、きつと。包容力っていうか、その能力を活かせる仕事が見つければいいのにね」

外が真っ暗になったロビーのガラス窓に、子供たちが集まって何かを始めた。湯気で白く曇ったガラスは、格好の大きなキャンバスと化していた。指先で、いちばん大きな子は覚えたての文字を書き連ね、他の二人は自由気ままな絵を描き殴っている。

ガラスの白い曇りの上を這う子供たちの拳が、大きなカタツムリに見えた。幾条もの透明な軌跡が、様々に交錯し、広がっていく。

大きく手を振って、クミコたちと分かれた。アカネの屈託のない笑い声が、いつまでも耳の中に残った。バイクに乗る前に、サトミの携帯に電話をかけた。七度目のコールで、眠そうな声が聞こえた。

「明日、帰るよ。安心して待っていてくれ」
つとめて明るく、イクコの体調を聞いた。

「少し、いいみたい。仕事も休んでる。岡田社長が、いつまでも休んでくれていいって。長い間、まじめに勤めてくれたからって」

「みんなで助け合えばどうにかなるさ」

「うん、大家さんも何かあったら、すぐに相談してちょうだいって」
アパートの一階の隅の部屋には、大家の老夫婦が住む。人の良さそうなその顔をタカシは脳裏に浮かべ、いろんな他人に助けられたというクミコの助言を噛みしめた。

「それからな、おまえ、自分の夢を捨てちゃダメだぞ。奨学金制度もあるし、それで足りなければ、俺がどうにかするから。志望通りの大学に進めるように、すこしは勉強もしろ」

一呼吸置いてから「わかった。サンキュー」とサトミは答えた。
「芸術は死なない。ただ生まれるのみだ」

とタカシが言うと、くすくす笑う声をした。
携帯の蓋を閉じないうちに、タカシはメールを一通、本村ナオコに送信した。

《そちらに帰り着いたら、会いに行きます》

ナオコへの想いが、幾重にも積み重なり、胸板を突き破って、今にも溢れそうだった。

赤いホンダにまたがり、エンジンをかけた。小さなピストンが、コトコトと上下する。ガソリンを燃焼させる逞しい鼓動を感じてい

る。フルフェースのヘルメットを被り、吐息で白く曇ったシルドを指で拭いた。アカネたちがロビーの大窓に這わせた、拳のカタツムリたちを思い出した。

空気の中には、目に見えない水の粒が浮遊している。冷たいものに触れると、見えない粒は白いしづくに変わる。しづくの上を、ひ弱な殻を背負った無数のカタツムリたちが、意志を曲げずに悠々と進み、その軌跡を残していく。それは誰に顧みられることもなく、やがて消え去るうたかたの記憶でしかない。

しかし、彼らは、何も怖れてはいない。頭に突き出た二対の触角のうち、長い方の先には眼があるが、明暗を感じるくらいで、歩みを逡巡させる余分なものは、おそらく何ひとつ見えていないから。輝く粘液を垂らしながら、ひたすら自分の生を全うする道を模索する。イチゴパックの中だろうが、朝露に濡れた紫陽花の葉の上だろうが、けして迷わず、余計な苦悩を抱え込んだりもしない。着実な匍匐前進を続けるだけだ。

タカシは、そんなカタツムリたちの強靱さに想いを馳せ、勢いよくバイクを発進させるのだった。

〈了〉